



第52回全日本大学個人選手権

2月18～20日/キョーイチボウル宇治

男子・小林選手一昨年準Vのリベンジ 女子・安田選手が1年生で選手権者に

第52回全日本大学個人ボウリング選手権大会は、2月18日から20日まで、キョーイチボウル宇治(京都府宇治市)を会場に、男子94名、女子24名が参加して行われた。

男女ともに、予選12G、準決勝6G、決勝3Gの21Gトータルで争われた。

男子

94名が出場した男子は、前年優勝の古畑和輝選手(東京経済大)が、予選を2724の1位で、連覇へ向け好スタートを切った。しかし5ピン差の2位に小林本気選手(大阪国際大)、

さらに28ピン差の3位に羽ヶ崎匠海選手(東京工科大)が続くなど、接戦となっていた。準決勝は、前半ビッグゲームを連発して782を叩いた小林選手が4178でトップに立ち、2位の羽ヶ崎選手は161ピン差、3位に後退した古畑選手は226ピン差と、決勝を前にほぼ勝負は決していた。決勝は555と伸ばせなかった小林選手だが、トータル4733で危なげなく逃げ切った。小林選手は1年生で出場した一昨年、準優勝に終わったリベンジを果たす優勝でもあった。652を打った羽ヶ

崎選手が4669で2位、そして3位には、5位で決勝進出の立花和貴選手(京都産業大)が古畑選手を19ピン逆転する4557で入った。

女子

24名によって争われた女子は、最終の4回戦で691を打った安田明香里選手(京都産業大)が予選を2607でトップに立ち、前年準優勝の泉宗心音選手(聖カタリナ大)が2547で2位、前年優勝の向谷優那選手(日本経済大)が2531で3位につ



▲女子優勝の安田選手(左)と男子優勝の木村選手

けていた。準決勝は安田選手が1196とまとめ、首位をキープ。前半一度はトップに立った泉宗選手は、後半568とペースダウンして24ピン差の2位、予選6位の鈴木波流選手(常葉大)が、各選手がスコアメイクに苦しんだ準決勝で1314と伸ばして、安田選手から32ピン差の3位で決勝に進んだ。

決勝は、2G目を終わって鈴木選手が安田選手を3ピン逆転してトップを奪ったが、最終Gで213を打った安田選手が、193にとどまった鈴木選手を再逆転、トータル4434で、1年生で頂点に立った。鈴木選手は17ピン及ばず2位、568と伸ばせなかった泉宗選手は4347で3位だった。

JBC会長杯第36回全日本年齢別選手権

2月12～14日
ボウルアピア郡山

地震に遭遇も全競技を無事終了

JBC会長杯第36回全日本年齢別ボウリング選手権大会は、304名が参加して2月12日から14日まで、福島県郡山市のボウルアピア郡山で行われたが、予選を終えた13日の午後11時過ぎに、福島、宮城で最大震度6強を観測した地震が発生、大会関係者は対応に追われた。幸いにもボウリング場に目立った被害はなく、翌日の決勝の実施を決断。しかし交通

網の混乱を考慮して、競技終了後は表彰式・閉会式も取りやめ、ただちに解散するあわただしさだった。

競技は予選9G、決勝3Gの12Gトータル(女子は1G15ピンのハンデ)で争われた。

19歳以下の部は、予選1位の木村晃選手(神奈川)が、予選2位の渡辺莉央選手(群馬)との接戦を56ピン退ける2810で優勝した。

20歳代の部は、予選で2個のパーフェクトを出した古畑和輝選手(東京)が、2位の宮澤拓哉選手(群馬)に196ピンの大差をつける2974で圧勝した。

30歳代の部は、鶴見亮剛選手(神奈川)が決勝で696を打ってトータル2714で、昨年準優勝の雪辱を果たした。予選1位の地元・福島の大塚正選手が55ピン差の2位だった。

40歳代の部は、決勝の最終Gまでもつれる接戦だったが、笹林朋幸選手(富山)が犬飼健志選手(愛知)を31ピン退ける2675で優勝した。

50歳代の部は、予選1位の藪下浩一選手(岐阜)が決勝はペースを落としたが、2580で逃げ切った。2位には2537で斎藤有作選手(神奈川)が入った。

60歳代の部は、山中徹治選手(東京)と吉田由美子選手(埼

玉)が2557の同ピンで、9、10フレ勝負のプレーオフへ持ち込まれたが、山中選手が39:38で制して優勝した。

70歳以上の部は、決勝の最終Gに279を叩いた宮戸康次選手(神奈川)が2371で逆転優勝、吉村悟選手(東京)が7ピン差の2位だった。



▲会場のボウルアピア郡山は、地震による大きな被害はなく、最終日の決勝まで行われた

日場協がリモートによるマネージメント・セミナーを開催

ストリング・ピンセッターはボウリング業界の救世主になる？

(公社)日本ボウリング場協会は、2月25日午後2時から、インターネットのZOOM会議を使ったマネージメント・セミナーを開催した。

テーマは、まだ日本では導入センターはないが、世界的には普及し始めている“ストリング・ピンセッター(ひも付きピンセッター)”とはどういうもので、ボウリング業界の新時代の幕開けにつながるものかどうかということだ。

原型は約60年前からあった

ようで、とくに約3分の1スケールのミニボウリングでは、この方式が採用されており、ご覧になったことがある方は、イメージしやすいだろう。

メリットとしては、従来のピンセッターと比べ構造がシンプルなため、導入費用が安いことや、導入後も熟練のメカニックが不要であること、パーツ代、電気代などのコストが安い点など、施設側には利点が多いようだ。フランスウィック社やキューピカAMF社をはじめ、

10社以上が発表しており、欧米では小規模施設やチェーンセンターを中心に、着実に導入実績が上がっているようだ。

問題は既存のボウラーの反応で、はじかれたピンのひもで残りピンが倒れるケースなど、従来と異なるピンアクションに違和感を覚えるボウラーもいるようだ。IBF(世界ボウリング連盟)は昨年11月にストリング・ピンセッターを公認することを決定したが、各国の競技団体が公認しているのは、カナダ、イ

ギリス、オーストラリアなど、加盟144カ国のうち7カ国にとどまっている。ちなみにUSBCは、今年いっばいの調査を経て結論を出すようだ。

いずれにしても今後普及が進んでいけば、ボウラー団体も否応なしに公認せざるを得なくなるのだろう。



▲フランスウィック社のストリング・ピンセッター



▲キューピカAMF社のストリング・ピンセッター